

アテネ民主政と戦争(2)シチリア遠征

Nakamura, Jun / 中村, 純

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

87

(終了ページ / End Page)

111

(発行年 / Year)

2014-01-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009683>

アテネ民主政と戦争（2）

—— シチリア遠征 ——

中村 純

はじめに

アテネは前 415 年にシチリア遠征を民会で決議し、挙行した。結果は惨憺たる失敗であり、実質的にこの失敗をもってペロポネソス戦争における勝敗の帰趨は決した。ただしアテネがスパルタと全面的降伏に等しい講和条約を結ぶまでには遠征軍の壊滅からなお 9 年もの歳月を要した。

本稿の目的は、ツキディデスの記述を主たる史料としてアテネ民会がシチリア遠征の立案と実行にどのように関与したかを精査し、失敗の原因を探ることにある。元来アテネのような市民の自由を尊重することを標榜する民主政ポリスが、迅速な判断とその断固たる実行を要する戦争のようなある種の極限状況の中で生き残っていくことはそうやさしいことではないだろうと考える向きがあっても不思議ではない。ところが、シチリア遠征の直前に行われたミュティレネ離反鎮圧とスファクテリア占領については、J. オバーが“the puzzle of democratic advantage”と呼んで、合意形成に手間取るはずの民主政ポリス・アテネが戦争で成功を収めた具体的事例として提示している⁽¹⁾。とは言え、これらの事例の直後に同じアテネ民主政によって挙行されたシチリア遠征ははなはだしい失敗の事例と言わざるを得ない。このときは何ゆえに“democratic advantage”なるものが機能しなかったのであろうか。

とりあえず問題の設定についていまだし説明を加えておきたい。

オバーの言うアテネ民主政の利点とはつまるところ高い水準の社会的協調行動と効果的な知の管理運営の点で他に抜きん出ていたということにはほかならない。これはペリクレス時代についてであればツキディデスも絶賛したところであった⁽²⁾。それにしてもオバーはミュティレネ離反鎮圧やスファクテリア占領に際してもう一歩踏み込んで具体的に言うところのあたりにアテネ民主政の利点

を見ていたのか。すでに別のところで論じたことではあるが、とりあえずこの点を再度簡単に整理しておきたい⁽³⁾。

さて、ツキディデスの語るところによれば、すでにペロポネソス戦争開戦時にコリント代表はアテネ人があくなき革新主義者であり、野心に満ち、ことにあたっては迅速で実行力もあり、遠くの利を見据えて行動することを指摘している。ツキディデスはこのアテネ人の特徴を「アテネ人の性質」としているが、オバーはいわゆるペリクレスの葬送演説を論拠としてこの特徴が民主政によって培われてきたものと考えることを主張する。アテネは自由で開かれたポリスであり、民主政下における政策決定は全市民の参加を前提とする民会の場で個々の、自分の判断に責任を持つ市民たちによってなされる。このように自由で開かれた社会においてこそ社会のさまざまなところに散在する知の効果的な利用が可能になるのであり、さらにまた参加型の決定方式であればこそ、一旦決められたことの実施にあたっては自発的、意欲的な集会的協同行動がなされるとする。かくして、knowledge management に優れたアテネには競争力の高い組織運営が可能となり、ミュティレネ離反鎮圧なりスファクテリア占拠なりといった軍事的場面でも成功を収めたということになる⁽⁴⁾。

筆者はかつてこのオバーの見解に寄り添いながら、そもそも参加型の決定方式自体を成り立たせる強い参加の意欲、自由な市民たちの結束を促しながら、個々の利を求めてではあれ精力的な活動に駆り立てる力の源泉を、今日しばしば「帝国」と呼ばれるデロス同盟を通じてのエーゲ海一帯の支配とそのもたらす果実に求めるのが妥当ではないかと評した。さらに、ピュロス占拠に関して言えば、デモステネスの異能ぶりと彼のような人物の飽くなき信念への固執を容認する、民主政が示す自由への寛容度こそがあの大きな戦果につながったと見るべきであると考えて、自由の賜物である多様性が果たした役割の大きさを指摘しておいた⁽⁵⁾。

ところでオバーは、ツキディデスの記述は高水準の社会的協調と効果的な知の管理運営という利点を持つものとしてアテネ民主政を描いていると読み解き、そのツキディデスの見解に賛同しながら、もう一方でツキディデスがアテネ民主政の制度的体質として過失を犯しやすい傾向を指摘していることについてはこれに否定的である。よく知られるとおりツキディデスはこうした過ちの最大のものとしてシチリア遠征を数えている⁽⁶⁾。しかしオバーは、ペロポネソス戦争の敗北はアテネ民主政の構造的欠陥の故であるとするツキディデスの見

解はペロポネソス戦争後のアテネのレジリエンスをうまく説明できない限り誤りだと主張している。念のために言っておくがこのことは当然のことながらシチリア遠征が失敗であったことを認めないということではない。後に見るとおり、オーバーはツキディデスがシチリア遠征の失敗をアテネ民主政の構造的欠陥によるものと見ているという想定を提示した上で、その分析では長期的視点から見たときのアテネ民主政の回復力の強さを説明できないであろうと論評しているのである⁽⁷⁾。

当面レジリエンスの問題は措くとして、本稿の目的はアテネ民主政がシチリア遠征という軍事上の大事件にどう対処したか、とりわけ民会がどのように関与したかをツキディデスの記述に探ることにある。そこでの関心はミュティレネ離反鎮圧やスファクテリア占拠の時にはマンヴィルやオーバーの言うところのアテネ民会の集合知がうまく発揮されたように見えるにもかかわらずその直後のシチリア遠征ではなぜそれが発揮されなかったのか、集合知がうまく機能することを妨げた要因は何であったかを可能な限り明らかにすることにある⁽⁸⁾。アテネ民主政が組織運営の仕組みとして見た場合に“democratic advantage”と称された長所と隣り合わせにいかなる弱点を抱えていたかを見極める試みといってもよいかもしれない。

以下、まずツキディデスのシチリア遠征評価を一通り見たうえで、シチリア遠征計画なるものが事態の進行のそれぞれの時点に立って見た時、具体的にどのような内容をもっていたかを確認する。その後にシチリア遠征計画を論じた民会の様子について記したツキディデスの描写を検討し、最後にシチリア遠征を企て、挙行したアテネ民主政の躓きの原因について考察することとしたい。

1. ツキディデスのシチリア遠征評価

『戦史』第7巻を締めくくるのは以下の記述である。

「かくしてこの〔ギリシアあげての〕作戦は、今次大戦中の諸戦に比すればもとよりのこと、筆者の判断によれば、われわれが過去のギリシア史から聞き知る限りの事例と比べても、正しく最大の規模を画すものとなり、しかも、勝者がこれに優る光輝を克ち得た例もなく、また敗者がこれに過ぐる悲惨に落ちた類もなきものとなった。じじつ、かれらはあらゆる面で徹底的な敗北を喫し、どの点を見てもかれらの損失の大ならざるはな

く、全軍潰滅という言葉さながらに、兵も船も、ことごとく失われ、さしもの大軍も故国に帰りついたものは、数えるほどしかいなかった。これがシケリア遠征の顛末であった」⁽⁹⁾。

惨憺たる失敗というべきであろう。ツキディデスの記述はこのような始末に至った理由をどのように描いているかをとりあえず一瞥しておこう。

まずシチリア遠征の始まりを告げる第6巻冒頭と、増援軍とともに指揮官の一人として派遣されたデモステネスの状況分析を記した第7巻42章、それに加えて政治家ペリクレスの優れた識見を讃えながらそれと対比してペリクレス以後のアテネ民主政の凋落を指摘した箇所としてよく知られる第2巻65章を取り上げて検討することとする。失敗の理由についてのツキディデスの見解を問題としたリーベシュツが6巻冒頭の記述は、少なくとも上に挙げた他の2箇所の記述と一見したところでは整合しないように見えるとして、詳細な検討を加えているので、その説を当面の手がかりに論を進めることとしたい⁽¹⁰⁾。

「戦史」第6巻は以下のように始まる。

「同冬、アテナイ人はさきにラケースやエウリュメドーンの指揮下に派遣したよりも、さらに大規模な軍備をととのえて再びシケリア島に攻撃軍を派遣し、できうればこれを攻略しようと企てた。しかしこれに際してほとんどのアテナイ人は、島の大きさや、そこに住するギリシア人や異民族の人口について何も知らず、さらにこの戦がペロポネーソス同盟を相手の戦争と比べても、ほとんど遜色ない規模の大戦争となりうることに気がつかなかった」⁽¹¹⁾。

リーベシュツはこの記述がそもそもシチリア遠征を決議したこと自体が誤りであったという印象を読者に抱かせると語る。そしてたしかにツキディデスはそういう意図を持ってこの記述を提示しているのだと⁽¹²⁾。

ところが、第7巻の記述はシチリア遠征の計画それ自体よりもその後の現地における指揮のあり方に問題があったかのごとき印象を与える。少し長くなるが第7巻の記述を以下に引く。

「しかし、デモステネスは現地の戦況を詳さに実見すると、自分としてはこれ以上に時を空しく費すことも、またニーキアースの轍を踏んでかれの陥った苦境に己れを陥れることも避けねばならぬと判断した（というのは、ニーキアースは着岸当初、敵を恐怖に陥れたにもかかわらず、その後ただちにシュラクーサイの城壁に肉迫して攻撃を続けようとはせず、

カタネーで越冬するに及んで、敵側の軽侮を買ったのみか、ギュリッボスがペロポネーソスから兵を率いて来るのにも先を越されてしまった。ニーキアスさえ直ちに攻城戦を強行していたならば、シュラクーサイ側とても援軍を要請することができなかった筈である。なぜなら、最初、シュラクーサイ人は自分たちだけの力で充分対抗できると思っていたのだから、弱勢と悟ったときには既に攻城壁で遮断されていたであろうし、また招請に応じて援軍がやって来たとしても、その時には現状のごとき援助の効果をあげえなかったに違いない。さてこのように事態を省察したデーモステネースは、自分の場合にも、敵の眼にもっとも恐るべきものと映るのは、現在ここに到着した第一日において他日に期しがたいことを知って、増援軍に吃驚している敵の虚をつき、一挙に事を決することを望んだ。そしてかれは、アテーナイ側の包囲遮断壁を阻むシュラクーサイ側の横断壁が一重構造であることを見て、もし味方の一隊がエピボライへ登る道を奪取確保し、エピボライの丘陵に陣取る敵兵をいま一度追い落すことができれば、敵側の横断壁を奪うのはたやすかろうと考え（こうなれば敵側は一兵も自分らの進撃のまゝに抗しえないだろう）、大至急この作戦を試るべきだと強く説いた。そしてこれこそ自分としては、この戦をたたかいおさめる最も手短な道であると考え、なぜなら、ここで成功すればシケリア征服の道が開けようし、さもなくば遠征軍を撤退させ、参軍のアテーナイ人将兵の生命や国全体としての力を、無意味な消耗から救うことができる、と」⁽¹³⁾。

この部分はたしかにシチリア遠征の失敗は計画自体のまずさにあったわけではなく、増援軍派遣に至った窮状もニキアスの優柔不断とそれによって起こった失策によるように描かれていると見えなくもない。ニキアスの責任をツキディデスはどう考えていたのか。これは興味深い問題であろう。

他方、第2巻はアルキビアデスの役割をめぐる評価の問題といってよいかもしれない。第2巻65章の記述は以下の通りである。

「これに比べて、かれ（ペリクレス）の後の者たちは、能力において互いに殆んど優劣の差がなかったので、皆己れこそ第一人者たらんとして民衆に媚び、政策の指導権を民衆の恣意にゆだねることとなった。このことが禍して、アテーナイのごとく大きいポリスを営み、支配圏を持つ国ではとうぜん、数多い政治的な過失が繰返されることとなり、その最たるもの

がシケリア遠征であった。この失敗は、かれらが敵について致命的な誤算を犯したために生じたものではなく、遠征軍にたいして本国の責任者たちが必要な応援をつげなかったことが大きい原因をなしていた。かれらは民衆指導権をめぐる個人的な中傷に明け暮れて、遠征軍の攻撃力をいちじるしく鈍らせ、また国内の政治的秩序を覆す最初の契機をつくったからである」⁽¹⁴⁾。

この部分では、ツキディデスはシチリア遠征の失敗は、すぐ上に引いた通り「かれらが敵について致命的な誤算を犯したために生じたものではなく、遠征軍にたいして本国の責任者たちが必要な応援をつげなかったことが大きい原因をなしていた」と語っている。ツキディデスがここで問題としているのはアルキビアデスの召還のことであろう。アルキビアデスの召還は遠征計画のそもそもの立案者を実施の場面から除くこととなったばかりでなく、彼を敵国スパルタへ亡命させたことによってキュリッポスの派遣をはじめとするさまざまな忠告を敵側に与える結果ともなった⁽¹⁵⁾。

さて、いったいツキディデスはシチリア遠征の失敗という事態を読者にどのように理解させようとしているのか。リーベシュッツは第7巻についてはたしかにニキアスがいくつかのチャンスを逃したことが綴られているのは否定できないとしても仮にアテネ軍がその好機を捉えていれば遠征が成功したと考える理由もまたないと主張する。第2巻の記述については、もしアルキビアデスが召還されていなければ事態はまた別の形で推移したであろうとツキディデスが考えているに違いないというところまでは認める。アルキビアデスの性癖や政策はともかく、ツキディデスの描写はアルキビアデスの能力を高く評価していると見られるからである。リーベシュッツの解釈によれば、ツキディデスがアルキビアデスの召還をひとつのターニング・ポイントとして描こうとしていることはたしかだとしても、そのことと遠征計画のよしあしとは別問題であって、計画そのものは、「己れの名誉心や利得心を満足させる」だけで、「成功すれば個人的に名誉ないしは利得がえられるが、失敗すればボリスの戦力を破壊するにひとしい」類のものとツキディデスは考えているとみる⁽¹⁶⁾。ツキディデスは、自己中心的な政治家たちによって抑制されるところか煽り立てられてしまった、きわめて楽観的な雰囲気の影響下で、非常に大きな困難が伴うという認識もなく遠征の決定がなされたと語っているのだ、というのがリーベシュッツの結論である⁽¹⁷⁾。つまりところツキディデスは惨劇の責任をおろか

な大衆とその機嫌を取る指導者たちという組み合わせの、当時のアテネ民主政のあり方に帰そうとしているということになろう。

D. ケーガンも近年ツキディデスの名を冠した書物の1章を割いてニキアスの責任について検討している⁽¹⁸⁾。彼は、まずツキディデスのシチリア遠征の経過を語る描写にはニキアスの責任を思わせるくだりが数多あることを指摘する。さらに、ツキディデスばかりでなく、当時のアテネ人もまたシチリア遠征の失敗の責めをニキアスに帰そうとしていた節もあるとして、パウサニアスの記述をあげる。そこには、シチリア遠征の戦没者の碑にはニキアスの名が記されていないことが記されている⁽¹⁹⁾。

ケーガンの主張にしばし耳を傾けてみよう。そもそも第1回目の民会ではそれほど大掛かりではなかった遠征軍を大遠征隊に仕立て上げたのは、ツキディデスの記述に従うならば、遠征を思いとどまらせようと目論んだニキアスの説得戦略の失敗の結果であった。ツキディデスがどうしてニキアスの意図を知ったのかは定かではないが、これはこれでニキアスの政治家としての能力に疑問符がつくことになる。しかも過大とも見える装備の要求をしておきながらケーガンの見るところによれば遠征遂行に不可欠となることが予想されていた騎兵がそこに含まれていない⁽²⁰⁾。さらにケーガンは、いざシチリアに出かけてからニキアスが犯した一連の失策と手をこまねいて何もしなかったがゆえに遠征の破綻につながった事態を数え上げ、最後に、撤退の時期を見誤ったことに言及する。かててくわえて、ゴンムによる、ここまで読み進めた読者がニキアスに好意的な印象を形成することは難しいだろう、という趣旨のコメントを直接引いたうえで、それではなぜツキディデスはニキアスへの異例の賞賛をシチリア遠征の顛末を語る際に述べねばならなかったのかを問う⁽²¹⁾。ツキディデスは以下のようなニキアス評価をシチリア遠征の記述の終わりにおいているのである。

「こうしてニキアスはかくの如きか、あるいはこれと殆んど大差ない理由によって、死を免れえなかった。かれの常日頃の言行が一つとして高き徳にそむくところのなかったことを思えば、私の世代のギリシア人がどうあったにせよ、ただかれのみは、このような不運の極みに終るべきいわれは無かったのであるが」⁽²²⁾。

ケーガンの主張するところによればそれは、シチリア遠征の悲劇がひとえにニキアスの過ちの故であるというような単純な解釈に読者が陥らないようにとい

う配慮なのである⁽²³⁾。

ツキディデスはあくまでも読者の眼をペリクレス以後のアテネ民主政の欠陥に向けさせようとする。互いに権勢を競い合う政治家たちは「民衆に媚び、政策の指導権を民衆の恣意にゆだねる」体たらくとなり、その結果として引き起こされた数ある失敗のうちの「最たるものがシチリア遠征」なのであった。ツキディデスがシチリア遠征の失敗にアテネ民主政の構造的欠陥を見ていることについてはもはや疑う余地はなかろう。この点については、ケーガンとリーベシュッツの結論も一致している。ペリクレス時代のアテネ民主政について「その名は民主主義と呼ばれたにせよ、実質は秀逸無二の一市民による支配がおこなわれていた」と評価したツキディデスにとって、ペリクレス死後のアテネはあくまでも衆愚にすぎなかった⁽²⁴⁾。

ところで、すでにペリクレス死後の時期にあたるミュティレネ離反鎮圧やスファクテリア占拠の時にはアテネ民会の集合知がうまく発揮されたように見えることについてはすでに別のところで検討した⁽²⁵⁾。それなのになぜ、その直後のシチリア遠征ではそれが発揮されなかったのかを探ることが当面の目標である。シチリア遠征が民会決議を経て実施されている以上この民会の判断の適切性をまずもって問題とせねばなるまい。しかしその問題を検討する前に、次節ではアテネ民会が決議した遠征計画の内容について今一歩踏み込んで考えておきたい。そのことと関連して、ニキアスの行動の評価についてもいっくらか見直すべきところが出てくるかもしれない。

2. シチリア遠征計画

さて、シチリア遠征計画と言われているものの内容はいかなるものなのか。これについてまず第一に思い浮かぶのはスパルタに逃れたアルキビアデスが語った以下の言明であろう。

「われらアテーナイ勢のシチリア遠征の目的は、先ず出来うればシケリアのギリシア諸邦を攻め降し、それに続いてさらにイタリアの諸邦を征服、最後にはカルケドーン人とかれらの支配圏に挑戦することであった。そしてこれらの諸邦が全部か、あるいはその大部分がわが手に陥れば、しかるのちペロポネーソスを攻撃しようと計画していた」。

しかしこれはあくまでもあと知恵であるといわねばなるまい⁽²⁶⁾。ツキディデ

スが『戦史』第2巻の8章から26章にかけて、シチリア遠征をめぐるニキアスとアルキビアデスとの議論の様子を描写している民会においてはアルキビアデスはもとより他の誰もイタリヤからカルタゴにまで及ぶ壮大な構想を述べてはいない。シチリア征服は遠征を支持した市民たちの心を捉えた夢想であったかもしれないが民会決議そのものの文言にはシラクサの攻略でさえも明確に言及されているわけではない。ニキアスとアルキビアデスが論戦を交わした民会の直前の民会で決議されたことは以下の通りであった。

「シケリア方面への軍船六十艘の派遣を可決し、同遠征軍の全権指揮官としてクレイニアースの子アルキビアデース、ニーケラトスの子ニーキアース、クセノパネースの子ラマコス任命、任務としては、先ずエゲスタを援助しセリヌースを撃つこと、戦況が味方に利があれば、レオンティノーイ人を助けて同市再建に尽力すること、さらにシケリア全島に対しては、指揮官らの判断によってアテーナイ側に最大の利益をもたらすような政策をすすめること、の条々が命じられた」⁽²⁷⁾。

この決議のなされた民会から

「五日目に再び民議会が招集されて、今回の遠征に必要な船隊の準備を能う限り迅速にすすめるための措置を講じ、また指揮官から追加項目の要請があればこれをも認可すべく協議に附することとなった」⁽²⁸⁾。

この民会の内容については次節で検討するとして、議論の結果アテネ民会は、

「ただちにその場で票決をおこない、指揮官たちが自分らの考えによってアテーナイにとって最善の道と判断するところに従い、遠征軍の兵員数、ならびに船団の組織一切に関して事を処しうる全権限を認めた」

とツキディデスは記している⁽²⁹⁾。どのような装備を調べて臨むべきかについて新たな決定がなされたことは明らかであるが、その装備をもって何をなすべきかについては5日前の決議が変更されたという記載はない。

さらにまた、シチリアに到着してみると期待していたレギオンには従軍を拒否され、あるいはエゲスタに軍資金負担の能力がないことが判明するに及んで3人の将軍が協議する場面があった⁽³⁰⁾。その時点ですらニキアスの意見は基本的にエゲスタとセリヌースの争いを解決するまではシチリアに留まること、可能であればレオンティノーイの復興を助けるがさもなくば本国に引き上げるというものであった。それに対してラマコスは直ちにシラクサを攻めるべきことを主張したが、アルキビアデスは、「これほどの大軍を率いて海を渡った上は、

目的を失して恥も外聞もなくこの地から兵を引くことはできない」と主張したもののラマコスとともにすぐさまシラクサを攻略しようとはせず以下のように述べた。

「先ずセリーヌースとシュラクーサイを除く残りのシケリア諸都市に対しては同盟交渉の軍使を派遣する、またシケリア原住民諸邦にも働きかけて、あるものにはシュラクーサイからの離叛を指囑し、べつのものにはアテーナイとの友好関係をすすめる。これは、シケリア全土から糧食と軍兵を調達する手だてである。その手はじめに先ずメッセーネ人を説くべきである（メッセーネは海峡を握る要衝の地であり、シケリアに入る関門を占め、役攻軍にとって充分頼むに足る港湾と基地たりえよう）。諸都市が味方に加わり、敵味方の色分けが明らかになってから、なおセリーヌースがエゲスタとの協調を認めず、シュラクーサイがレオンティーノイの復興を許さぬというのであれば、そのときになってシュラクーサイとセリーヌースを相手に戦をまじえて然るべきだ」⁽³¹⁾。

結局のところラマコスは自説を撤回してアルキビアデスの意見を支持することとなっている。アテネ民会が3人の指揮官に明確にシラクサ攻略を任務として与えていたとすればこのような議論の展開は不自然というしかない。実際には遠征軍がその矛先をシラクサに向けるまでにはなおいくばくかの紆余曲折を経ねばならなかったのである。

さて、当初アテネ民会はシラクサの攻略をその射程には入れていたとしても少なくとも明確には決定していなかったとするならば、そこからあれほどの惨憺たる敗北に至るまでにはまだいくつもの判断の分かれ目があったといわねばなるまい。しかし、アテネ民会の直接の関与という点に焦点を絞ってしまうと、前414年にニキアスの要請に従って資金と騎兵を送ることを議決したという簡潔な記述が見出される以外には、その年の終わり頃にニキアスの嘆願を受けて開かれた民会の判断についてしかツキディデスの記述には検討すべきところが残されていない。ニキアスは、撤退を命ずるかさもなくば「第一次軍よりもさらに強大な遠征軍をもよおし、巨額の軍資金ともどもに派遣するか」を要請するとともに病気を理由に自身の指揮官退任と交代の指揮官の派遣を求めている。これに対してアテネ民会は、

「ニーキアスの指揮官職解任を認めず、その代りに、かれの同僚指揮官が正式に選出されて現地に着任するまでの期間、病身のニーキアスが

一人で重責に苦しむことのないようにとの配慮から、すでに現地でかれの配下にあった者たちの中からメナンドロスとエウテュデーモスの二名を追加任命した。そして第二次遠征派遣を決議し、これには海軍と、アテーナイ市民兵役簿および同盟諸国からつめられた陸上部隊が参加することに定められた」。

またニキアスの正規の同僚指揮官としてデモステネスとエウリュメドンが任命された⁽³²⁾。もちろん結果からさかのぼってみれば、この決定はいたずらに損害を増加させたに過ぎないともいえるかも知れぬが、この時点での判断として見るならば、ニキアスの交代を認めなかった点にはいささか疑問符が付くかもしれないとしても、一旦決定し取り掛かった事業をあくまでやり抜こうとする姿勢そのものはあり得べき選択といえるのではないか。すでに遠征経験のあるエウリュメドンとスファクテリアの英雄デモステネスを指揮官として増援軍を資金とともに送る決議はその時点での最善を尽くそうとする覚悟を表すものと見ておかしくない。ただし前に引いたデモステネスの省察を読む限りでは場合によっては撤退も含めたかなり幅広い判断が現場の指揮官に託されていたと推察することが可能のように思われる⁽³³⁾。現実には到着直後にシラクサ攻撃を決断してこれに失敗したデモステネスはすぐさま撤退を主張した。これを許さなかったのはニキアスであり、あるいは彼の想定する民会の反応であって現実の民会ではない。

民会に集うアテネの市民たちがシチリア遠征にかなり虫のいい望みを託し熱狂したことは次節でも見るとおり否定できないが、あれほどの失敗に突き進んでいく重大な判断の分岐点のいちいちで、アテネ民会がその判断に直接関与し制御することができたであろうかと問うならばそれは難しかったというしかあるまい。たとえばいっばいに膨らんだ欲望に見合った成功を収めることはできなかったとしても全軍壊滅という決定的な敗北に至る前に事態を収拾する機会なら十分にあったであろうことはツキディデスの記述を追ってみれば容易に推測できる。しかし、いざことが動き出してしまった後では、惨劇への歩みの一步一步は民会の判断を待つ暇もなく現場の戦場で踏み出されていった。

しかしそれではニキアスはなぜ撤退を決断しなかったのか？ この問題については次節で民会における論戦の検討を経た後に今一度考えてみたい。今確認しておきたいことは、デモステネスの撤退提案に対してついに首を縦に振らなかったニキアスは元来指揮官に任ぜられる前から遠征そのものに賛成ではな

かったわけだが、指揮官に就任した後もデモステネスの撤退案に反対することとなったその時まで一貫してシラクサの攻略に必ずしも積極的ではなかったし、力尽くでの武力制圧を目指していたようには見えないということである。すでにみたとおり、三者協議の時点で、ニキアスは遠征軍派遣の第1の任務であったエゲスタとセリヌースの紛争の解決を超えたシケリアへの介入には消極的であった。一旦は成功裏にシラクサを目指す敵前上陸を果たし、越冬した後資金と騎兵の増援を得てシラクサ攻撃を試みたものの施策は後手に回りがちで進捗ははかばかしくなく、結局は撤退か第二次遠征軍の派遣かをアテネ本国に求め、自身は指揮官職を辞することを願っていることはすでにみたケーガンの論考に詳しい⁽³¹⁾。にもかかわらずデモステネスの撤退の主張に対して決断できなかった理由のひとつは内通者との協議への一抹の期待であったとされている⁽³⁵⁾。そのことを勘案するならば、ケーガンの指摘するようにニキアスはただいたずらに手をこまねいていたわけではなく、もともとニキアスが目指してきたのは内通者との協議を進めながらより安全で確実な方法で目的を達成することであって、性急な武力制圧ではなかったと考えることもできるのではないか。

アテネ本国でも市民たちはニキアスのスタンスを把握していたと考えてよいと思われる。前414年の上演とされるアリストファネスの喜劇『鳥』ではニキアスの優柔不断振りが揶揄されている⁽³⁶⁾。ビュアリーはニキアスではなくてデモステネスにことを託すべきであったと述べているが⁽³⁷⁾、指揮官選任の際に、現場の指揮官の裁量にことの成否がかかっていることをアテネ民会が承知の上であったとすれば、どちらかといえば積極的で行動的なデモステネスを新たに指揮官として選んでおきながら慎重派のニキアスを同僚の指揮官職にとどめておいたアテネ民会の判断の裏にあった思いを付度することはさして難しくないようにも思われる。いずれにしてもこの形の顔ぶれのそろえ方が当初のアルキビアデスとラマコスに並んでニキアスをすえた時の選び方と軌を一にしていることはたしかであろう。

ともあれ、デモステネスの撤退案を退けたことが全軍壊滅という悲劇につながったことは否定すべくもない。撤退だけでも果たしていればその時まだ遠征軍はヘルモクラテスの危惧を呼び起こすほどの勢力を保持していたのである⁽³⁸⁾。このときのニキアスの判断については後ほど検討したい。

3. ニキアス対アルキビアデス—民会における論戦

アテネの市民たちがシチリア遠征を決議するに当たって交わした議論をツキディデスがどのように描写し、読者に提示しているかを検討することが本節の課題となる。第6巻9章から25章がそれに当たる。

まずはじめに議論の展開を簡単にまとめておく。主たる発言者は遠征計画の提案者でもあったと言われるアルキビアデスと指揮官職に就くことさえも望んでいなかったとされるニキアスである。ツキディデスによれば、そもそも遠征計画そのものに反対であったニキアスは、「演壇から市民の翻意を促すことを願って」、ペロポネソス勢との戦いは終わったわけではないこと、シチリアは遠く、そして人口も多いのでたとえ手に入れたとしても維持するのは難しいこと、必ずしもこの時点でエゲスタを援助する必要はないこと、などを述べて遠征決定を翻すよう促す弁を述べた。この演説の終わりの部分でニキアスは、アルキビアデスに対する攻撃をしかけ、「賢明なる年長者諸君」に対して、臆病者とみなされることを恐れずに遠征に反対するよう呼びかけを行う。これに対してアルキビアデスは、自分がたとえ歳は若くとも遠征の指揮官にふさわしい人物であることをかなり挑発的にしかし一応は弁明というコンテキストの中で述べた上で、シチリアの状況に彼なりの説明を加えながら、シチリア恐れるに足らずと市民を鼓舞し、エゲスタの求めに応じて支配権の拡大を図ることこそが父祖以来のアテネのやり方であり、結局はそのことが安全を保つ最善の道であると説く。そこでニキアスは、ツキディデスの解説に従うならば、意図的に巨大な軍備を要求する演説をして、今一度市民の翻意を期待するが、彼の意に反して、アテネ民会は、指揮官に必要なと考えるだけの準備を整える全権限を与えることを決議し、その上で遠征に臨むこととしたのだった⁽³⁹⁾。

「戦史」の演説部分が実際に語られたことをそのまま記載したものではないことは夙に知られていよう。そこに綴られているのはツキディデスにとって「各々の発言者がその場で直面した事態について、もっとも適切と判断して述べたにちがいない」演説であった。事実展開を語る部分と演説部分とはしばしば絶妙な対応関係を示す。演説部分がその後の事件の展開の見通しを前もって示していたり、事態の展開を語る部分に対する注釈の役を果たしている場合も見られる⁽⁴⁰⁾。今取り上げるニキアスとアルキビアデスの論戦もツキディデス

の解釈を色濃く示す部分であると考えてよいであろう⁽⁴¹⁾。ツキディデスが読者に与えようとしている構図についてはさしあたりオバーの説を導きの糸として考えていきたい。

オバーは、このシチリア遠征をめぐる民会の描写においてツキディデスが読者に示しているのは、民主政的知と比べた自らの奉じる歴史的知の優越性であるとする。この場面での歴史的知は、ニキアスが使うプロノイアということばに端的に表されている。プロノイア、すなわち予見こそが歴史的知の優越性を象徴しているというべきか。比較的近い過去の歴史ですら十分に吟味することなく、たまたま聞いた話をいとも簡単に信じてしまうアテネの大衆は欲望（エピテューミアー）ということばを体現するアルキビアデスの弁論によって作り上げられた幻想に酔い、偽りの一体感に浸り、ニキアスはそのような大衆の喝采を求めて競う言論のアリーナというトラップにとらえられて、真摯にその心中を吐露することができない、そしてアテネは破滅への道を突き進む、といった形の理解を、ツキディデスは読者に与えようとしているとオバーは見ている⁽⁴²⁾。

歴史的知は必ずしも人の喝采を巻き起こすことのできるものではない⁽⁴³⁾。ニキアスは民会に集う大衆を説得しなければならなかった。まずは自分が信念にたがうことは言わない誠実な人物であることをアピールする。わが身一身の利益のために国益にたがうような提案はしない、と。その上で、シチリア遠征計画のリスクの大きさを評価するにあたって、ニキアスがまずアテネ市民に考慮を促したのは、シチリアは征服を企てるにはあまりにも大きく、そしてまた一時的に休戦中とはいえ、スパルタとの戦いはまだ終わっていないという点であった。これについてアルキビアデスはシチリア諸ボリスは烏合の衆にすぎず組しやすいというかなり楽観的な認識を対置している⁽⁴⁴⁾。そして軍事的に見た遠征の成功の可能性の度合いを具体的に云々することから視点をずらしてアテネ帝国の栄光とそれを築き上げた父祖の精神への言及をもってアルキビアデスが弁論を締めくくったとき⁽⁴⁵⁾、民会の趨勢は数日前の決定を翻すことなく遠征を実施する方向に向かっていた。

「ここにいたってニーキアースはさきの議論を繰り返してみてももはや大勢の制しがたいことを悟り、逆にもし自分がおびたがしい戦備をかれらに義務づければ、その並ならぬ大きさによっておそくかれらの決議をひるがえさせることができようかと」

膨大な軍備の必要性を説いた。

「ところがアテナイ人らは、膨大な軍備を聞いて出航したい慾望を失うどころか、逆にますますその氣持を強くして、ニーキアスの意図とは逆の氣運を招来した。つまり、かれらはニーキアスの提案は至当であると賛意を表すると同時に、提案のごとき軍備をもってすれば、遠征は絶対安全であろうと思ったのである。そして遠征を望む強烈な執着が、ひとしくすべての者たちを囚にしてしまった」⁽⁴⁶⁾。

かくしてニキアスはことの理非よりも無知な大衆の喝采が提案の採否を決めるアテネ民会の予想外の反応になす術もなく敗れ去ったとツキディデスは読者に告げているのだとオーバーは言う⁽⁴⁷⁾。

さて、ニキアスの慎重論は、「戦時中は支配圏の拡大をつつしみボリスに危険を招かぬようつとめるならば、戦は勝利に終る」と語っていたペリクレスの言葉と軌を一にしている⁽⁴⁸⁾。しかし、ペリクレスがその警告を発したときから少なくとも10年以上の月日が経過している。とりわけブラシダスのトラキア侵入を経験した後のアテネはもはや、開戦時にペリクレスが立てた、基本的には防御を旨とする戦略から何らかの形で一步踏み出さざるを得ない状況にあったと考えることもできる⁽⁴⁹⁾。421年にスパルタとの講和を実現させたニキアスとその後にアルゴスと結んでマンティネイアの戦いを仕掛けたアルキビアデスとの基本的な立ち位置の違いがここでの両者の対立の背後にあると見るべきであろう。軍事的なリスクだけを問題とするならその点について、民会の動向がアルキビアデスなりニキアスなりのいずれかの見解を大きく支持する方向に傾いた形跡をツキディデスの記述に見て取ることは難しいのではないか。大きなリスクを承知の上でなおそのリスクを敢えてとろうという決意を大衆にさせたのは、

「されば諸君、ニーキアスは弁を尽して静観主義を説き、若年層に対する老年層の対立を企てたが、これに惑わされてはならぬ。そうではなく、われら本来の秩序に服すべきだ。ちょうどわれらの父が若くして年長の者らと共に立案の場に参加し、われらの国威を今日の高きに掲げたように、諸君も現在ふたたびかつてと同じ精神に即して、ボリスをさらに前進させるべく努力して貰いたい。そして老いたるも若きも、互いに協力せずば何事をも成し難きに思いをいたし、また、軽率なるものも中庸をえたるものも、また人すぐれて鋭敏なるものも、一団と混り和を得たところ

に、最大の力を發揮しうる、と考えねばならぬ」⁽⁵⁰⁾

というアルキビアデスの主張にあったと考えた方が無理がないように思う。

かくしてニキアスはかつてディオドトスが嘆いたディレンマに嵌っていく⁽⁵¹⁾。何かに反対する時、わざとそれをやるには大きな困難が伴うことをあげつつ反対の結論を導き出そうとするのは「アレクサンドロスに贈る弁論術」にも見られるほどの、ことさら珍しいわけではないレトリックであったのかもしれない⁽⁵²⁾。しかしこの目論見は成功しなかった。ニキアスの思惑に反して民会はアルキビアデスとニキアスの意見のいずれを取るかという選択の代わりに膨大な軍備をもってすればリスクの高い計画もやり遂げられようと夢想し、いっせいに一つの方向を向くことになってしまったとツキディデスは報告している。オバーの説を敷衍するならば、言論のアリーナという性格を持つ民会によって最終決定を行うアテネ民主政の持つ危うさがここに至って露呈されたことを示すものとツキディデスは考えているということであろうか。すでに前節で示した第二巻65章のペリクレス以後のアテネ民会の評価とびったり平仄を合わせた記述であろう。

かつて筆者は、ミュティレネの離反鎮圧とピュロス占拠事件とに共通して言えるのはペリクレス死後にあってアテネがまだ帝国支配を堅持するという開戦時のペリクレスの戦略を固持しているということであると述べた⁽⁵³⁾。ニキアスの考えによれば、シチリア遠征はまずもって維持しておくべき帝国支配を危機にさらすものであるが、アルキビアデスによればそのような消極性こそがアテネ人の気質にも帝国支配を維持してきた精神にも反するものであり、まさにそのことが帝国支配を崩壊に導くものなのであった。両者の対立は、ペリクレス死後の事態の新たな展開に直面して、ペリクレスが立てた戦略をどこに力点を置いて維持していくかという考え方の違いのように見える。そしてこれもまたすでに述べたとおり、ミュティレネ、ピュロスでアテネが成功を取めたことについては、コリント代表が指摘するとおりのアテネ人があくなき革新主義者であり、野心に満ち、ことにあたっては迅速で実行力もあり、遠くの利を見据えて行動する人たちであったこと、しかもその「アテネ人の性質」は、ペリクレスの「葬送演説」に理想的に語られた参加型のアテネ民主政によって培われてきたものであったということによるところが大きかった⁽⁵⁴⁾。そのことも加味して考えるならば、シチリア遠征に際してもアテネ民会が前に引いたアルキビアデスの主張のほうにより強く惹かれる様を想い描くのはむしろたやすいこと

であるように思われる⁽⁵⁵⁾。オバーは、アテネ民主政が参加型の決定方式であればこそ、一旦決まればその決定の実施にあたって自発的、意欲的な集合的協同行動がなされるとみているが、シチリア遠征の場合にもすでに前節で見た通り、アテネ民会は、シチリア遠征の計画自体のよしあしの判断がよかったかどうかはともかくとして、一旦決定された遠征をやりぬくべく追加の決定を行っていったと考えることもできる。オバーが長所と見た点はここでも機能していたと考えるべきではないか⁽⁵⁶⁾。

以上のように考えた場合、それでは何ゆえにシチリア遠征はあれほどの失敗に終わる結果となってしまったのか。節をあらためて考えてみたい。

4. アテネ民主政の失敗

さて、オバーの見解ではアテネ民主政の利点は効果的な知の運用という点にあったわけであるが、この点についていまだ少し踏み込んでピュロス占拠とシチリア遠征との比較をしてみよう。ミュティレネの離反鎮圧とは異なりピュロス占拠事件はデモステネスに「個人としての希望が容れられて、彼が希望する機会が生ずれば、シケリア派遣の40艘の船隊をペロポネーソス沿岸で用いてもよい、という公の許可が与えられた」⁽⁵⁷⁾アテネ船隊がデモステネスとともにたまたまの嵐という自然現象のためにピュロス滞留を余儀なくされたところから始まっている。その後も、さまざまな偶然に遭遇し、時にはそれに乗せられながらその時々によしと見做される判断を積み重ねた結果が大戦果につながったのであった⁽⁵⁸⁾。他方、シチリア遠征においては状況の変化は悪い方へ悪い方へと遠征軍の運命を運んで行った。ピュロス占拠においてデモステネスの異能ぶりが光彩を放っているとすれば、シチリア遠征においてはニキアスの不運がひときわ印象的である。デモステネスは民会の賛同を取り付けることができなくても粘り強くピュロス占拠の機会を窺っており、ついにはそのチャンスをつかんだ。他方ニキアスは遠征計画当初から反対を表明していたにもかかわらず状況の進展に流されながらついにはシラクサ攻略に手を染め、戦況に利あらずと見たときにもむなしく指揮官の辞任を求めながら、結局は撤退の機を失って惨憺たる敗北を喫してしまった。ピュロス占拠の時もデモステネスをケルキュラを目指した船隊に同行させた民会の決定ははなはだ曖昧なものであったが、シチリア遠征の際の民会決議も現地の指揮官団の判断を許容する緩やかな文言

になっている⁽⁵⁹⁾。一瞥しただけではシチリアでの失敗は指揮官の資質に起因するものであるかのごとくに映り、ピュロス占拠と比べて民会の関与に大きな差があるようには見えない。

しかしそれでは、ニキアスはほぼ一貫してシラクサの武力制圧に消極的であったのになぜデモステネスの撤退案に強い抵抗を示したのであろうか。アテネ民会の決議が現場の判断を許容する比較的緩やかな文言になっていたことは事実であるとみななければならないとしても、前節で見たアテネ民会の議論の描写から何かシチリアにおけるニキアスの行動を縛っていた言外の意向とでも言うべきものが見つけられるかもしれない。以下、この点について少し考えて見たい。

ツキディデスによればニキアスは以下のようにデモステネスに答えたとされている。

「アテーナイ本国の決定をまたずして撤退すれば、必らずや自分たちの行動が本国で咎めを受けることを、自分はあまりにもよく知っている。なぜかといえば、われらの行為の是非について、裁きの票を投ぜんとする市民らは、われらとは立場を異にする。市民は事実の目撃者ではない、ひとがあれこれと批評するのを聞いて意見をこしらえあげる、そして言葉たくみに中傷する者があれば、たちまちその言を鵜のみにして信じこむ手合いである。さらにまた今ここにいる将兵の多くは、いやその過半数と断言してはばからないが、今でこそかれらは声をはげまして事態が陰悪であると叫んでいるが、一たん故国に到着してみるがよい、逆に、指揮官連は金品で買収されて兵を引いたと叫びたてるに違いない。されば、すくなくとも自分は、かくのごときアテーナイ人の性癖を知悉している人間として、選ぶべき道を知っている。汚辱にまみれた弾劾をうけ、何の言分も認められずにアテーナイ人の裁きで公けに葬りさられるよりも、止むを得ればこの身をひとり死地に投じようとも敵の手で倒される方を潔しとする」⁽⁶⁰⁾。

振り返ってみれば前節で検討した民会では、議論の当初には、若者と老人のジェネレーション・ギャップという形でくくられる推進論から慎重論までの幅を持つある種の多様性が見られた⁽⁶¹⁾。ただしニキアスは周りに気兼ねして意見を控えることのないよう「賢明なる年長者諸君」に呼びかける必要を感じているので、この多様性は当初から脆弱なものだったようにも見える。そしてニキアスの第2弁論の後になると、ニキアスの思惑に反して民会はアルキビアデ

スとニキアスの意見のいずれを取るかという選択の代わりに膨大な軍備をもってすればリスクの高い計画もやり遂げられようと夢想し、いっせいに一つの方向を向くことになってしまったとツキディデスは報告している。集団のメンバーがあくまでも自分の立ち位置から問題を考え抜くという態度を放棄し、周りを見回して大勢につくという事態に陥ったときには、たまたま誰かある人の誤った判断が増幅されて悲惨な事態に陥ることが起こり得るということは、バブル経済の例を引くまでもなく、しばしば注目されていることと言えよう。この同調の圧力にニキアス自身がすでに民会の時点で屈してしまっている。そのことがいざシチリアに出かけてもできるだけ消耗を防ぎ可能な限り速やかに引き上げることをよとする意見を表明しておきながらずるずるとシラクサ攻略に引き込まれ挙句の果てに常套句に化したかと思われる辞意表明をとまなう援軍要請を民会に送るにいたって抜き差しならぬところまで追い込まれてしまった所以ではあるまいか。ことここに至っては、民会の反応を予想するニキアスの不安にツキディデスその人も切実に同情を寄せたであろう⁽⁶²⁾。

今仮に上記のように推定することが許されるとすれば、ツキディデスが語るアテネ民会における決定の際の様子、その時の「空気」が、民会が具体的に何を決議したかとは別のところでシチリアにおけるニキアスの動きを縛っていた事情が象徴的に浮かび上がってくるように思われる。ピュロス占拠の場合との比較に立ち返って考えるならば、その時のデモステネスのあくなき執念、言い方を変えればまわりの意見に左右されない高い自律性が全体としてのアテネ民主政の利点を発揮するために必要な多様性を確保し、他方ニキアスが抱いていた、アテネ民会、あるいは大衆がいかなる振る舞いをするものかということの了解の中味と、出自はともあれ典型的な上層市民としての中庸を尊ぶ徳性が、彼を同調の圧力に屈せしめる結果をもたらし、全体としてアテネ民主政が有すべき多様性を失わせることとなってしまったのではないか。同調の圧力に耐えかねたのはニキアス一人ではない。

「市民ら大半の余りに強い渴望に圧されて、これを喜ばなかった者ですら、反対の投票をすれば国家に対して忠誠心を欠くと見做されるのではないかと恐れから、敢て所見を表明しようとはしなかった」⁽⁶³⁾
とツキディデスは証言している。多様性の確保こそがアテネ民主政の長所たる効果的な知の管理運営をもたらすのだとするならば、

「遠征を望む強烈な執着が、ひとしくすべての者たちを囚にしていしまっ

た」⁽⁶⁴⁾

という記述に見られるとおり、民会の成員が同調の圧力に屈してしまい、あるべき多様性が失われてしまったところにシチリア遠征の失敗に少なからぬ影響を与えた原因のひとつがあったと考えることができよう。

結びに代えて

シチリア遠征は惨憺たる失敗であった。その失敗は単に遠征軍が派遣当初に背負った期待にこたえられなかったということだけに留まるものではない。せめて全軍の撤退だけでも無事に果たしていれば、せいぜい壮大な空騒ぎに過ぎなかったかもしれない試みが、形勢不利と悟った後になお、速やかに撤退する決断を下すことも出来ず、その結果ツキディデスをして前代未聞と言わしめた巨大な遠征軍にシチリアの地で壊滅の憂き目を見させた時、この遠征は一大惨事と化したのである。

シチリア遠征の失敗に、スファクテリア占拠とは逆の意味で偶然的作用を見ることはさして不自然ではなからう。月食という自然現象がたまたま撤退の決断の時に生じたことは、たまさかの嵐がスファクテリア占拠の幸運なきっかけとなったことと対照的な出来事であった⁽⁶⁵⁾。アテネ民会が弁論のアリーナの様相を呈していたことがアテネ民主政の構造的な欠陥とまで言えるかどうかはさておき、この時の遠征の悲惨な結果に大きな影響を及ぼしていることはツキディデスの指摘を待つまでもなく十分首肯できる。ビュロス攻略を議論した民会での指揮官職をめぐるクレオンとニキアスの鞘当が意外な方向とは言え結果的に大戦果につながったことに比して⁽⁶⁶⁾、遠征をとどめようとしたニキアスの演説がどのような結果につながったかを思うと理屈のみでは動かない民会のあり方がことの成り行きに良かれ悪しかれ大きな影響を与えることは否定できない。しかし、アテネ民主政が組織運営の仕組みとして見た場合に“democratic advantage”と称された長所と隣り合わせにいかなる弱点を抱えていたか、という問いに立ち返って考えるならば、以下のような推論も可能なように思われる。アテネ民主政が戦争遂行に当たって優れた判断を示し、華々しい成功を収めたミュティレネ離反鎮圧やスファクテリア占拠の際に、その組織運営の利点を発揮することができたのは、本論冒頭に述べたとおり、自由を標榜する民主政下に生きる市民たちの間に比較的高い自律性に支えられた多様性が確保され

ていたことによるところが大きかった⁽⁶⁷⁾。そのことと比較してシチリア遠征において際立った特徴を示しているのは同調の圧力であったと言えるのではないか。

多様性を前提として、時にはなかなか言語化され得ない現場感覚のようなものも含めて、社会に散乱した知を、参加型の直接民主政という仕組みをもって民会の場において統合していくという方法では、全てのメンバーの考えが明晰に言語化された上でどの考えが最も優れているかが判定されるわけではない。各成員がそれぞれの立ち位置から見て是とした政策が全体像としてはいわば暗黙のうちに、理ではなく数によって統合される。一から十まで仔細に言語化されているわけではなく、場合によっては互いに矛盾する要素も重層的に含みこんだ、ある種曖昧な決議を実行するに際しては、その決議の含蓄をやはり暗黙裡に受け止めながら行動できるということが必要なのではないか。スファクテリア占拠の際のデモステネスの振る舞いが好例であるといえよう。そのような重層的な理解を含んだ柔軟な対処を妨げ、硬直化した行動を誘うのが同調の圧力であり、その圧力の最も悲惨な犠牲者がニキアスであった。

すでに何度も引いたとおり、オバーは、アテネ民主政は Knowledge Management に優れており、そしてアテネに特徴的な知の配分と利用はペリクレスが葬送演説で述べた参加型のアテネ民主政の特徴と一体のものであったと述べている。アテネ民主政はつねにイノベーションが必要とされるような時代に適合的なパフォーマンスの高い組織だった。しかし常に行動的で積極的な動きに活路を見出そうとする組織であれば失敗を恐れてはいられない。とすればレジリエンスが高いということもまた重要なことであろう。アテネ民主政はペリクレス以後においても厳しい環境の中を生き抜いていく競争力の高い組織形態として評価できると見るオバーの主張は傾聴に値する⁽⁶⁸⁾。アテネ民主政、とりわけペリクレス以後のそれはツキディデスを初めとして同時代の著作家たちからしばしば衆愚政と批判されてきた。それに対してマンヴィルやオバーの論考は集合知というこれまでとはやや位相を異にする観点からアテネ民主政を評価する研究として異彩を放っている⁽⁶⁹⁾。そこで取り上げられた集合知という考え方を踏まえながら、ペリクレス死後のアテネ民主政の組織としての利点ないしは欠点を具体的に評価することが本稿とこれと対をなす今ひとつの論考との目的であった⁽⁷⁰⁾。端的に結んでおくとすれば、スファクテリアでの成功は状況の変化に柔軟に対応して集合知が機能するためには多様性の確保が必要

であったことを示していたが、シチリア遠征の失敗は、多様性を失ってひとつの意見に雪崩を打って吸い込まれていくような事態こそがアテネ民主政にとって、嵌ってはならない大きな陥穽であったことを教えている、ということになるだろうか。

《注》

- (1) Ober, 2010, p.65-87.
- (2) Ober, 2010, p.72.
- (3) 中村純, 2013, p.76-78.
- (4) Ober, 2010, passim, esp. p.81-72.
- (5) 中村純, 2013, p.65, p.75-76.
- (6) Thuc. II, 65.
- (7) Ober, 1998, p.120-1, Ober, 1994, p.118, 本文 10-11 ページ。
- (8) P.B.Manville, 1996, p.381-2, J.Ober, 1994, p.103.
- (9) Thuc. VII, 87, トゥーキューディデース, 久保正彰訳, 『戦史』下 岩波文庫 1967, p.243。以下, ツキディデースの訳文は全て久保正彰訳, 岩波文庫による。
- (10) Liebeschuetz 1968, p.299-306.
- (11) Thuc. VI, 1, 『戦史』下, 21 ページ。
- (12) Liebeschuetz, p.299, 306.
- (13) Thuc. VII, 42, 『戦史』下, 186 ページ。
- (14) Thuc. II, 65, 『戦史』上, 253-4 ページ。
- (15) Liebeschuetz, p.302, 305-6.
- (16) Thuc. II, 65, 『戦史』上, 251 ページ。
- (17) Liebeschuetz, p.299-306.
- (18) D.Kagan, 2009, p.188-221.
- (19) ケーガンは戦没者名簿にデモステネスの名は記されているが、ニキアスの名がないことに注意を促し、以下に引く史料をあげている。「(シケリア戦線の戦没者では) 将軍のなかにニキアスの名が刻まれていない反面、一般兵卒では市民と並んでブラタイア人の名が見える。どんな理由でニキアスが除外されたのか、私の書きたい内容はフィリストスのそれと寸分違わない。彼はこう語っているのだ。(シケリア遠征の同じ将軍でも) デモステネスは自分を除く他の将兵のために和を講じたのであって、本人は降伏などせず、身柄を捕らえられるや、自殺をはかった。しかるに、ニキアスはみずから投降志願者に成り下がったのだと。このような理由から、ニキアスの名は石碑に刻まれなかった。捕虜志願者で、軍事にふさわしくない者と断罪されたのである」。Pausanias I, 29, 12. パウサニ阿斯著, 馬場恵二訳, 『ギリシア案内記』上, 岩波文庫 1991, 142 ページ。ケーガンはただしニキアスの名が載せられなかった理由については必ずしもフィリストスの語るところをそのまま受け止める必要はないとし、ただアテネ人が何らかの意味でニキアスに罪ありとみたことだけを取り上げている。D.Kagan, p.188, 217-8.
- (20) cf. V.D.Hanson, p.201-33.

- (21) D.Kagan, p.218-9. cf. Dover, HCT, 4.461. 柳沼重剛, 44 ページ参照。
- (22) Thuc. VII. 86.『戦史』下, 242 ページ。
- (23) D.Kagan, p.219-21. ニキアスとツキディデスには政治的傾向や大衆の無理解による過度のとも見える弾効を受けたなどといった共通点があるがツキディデスのニキアス賛美はそれだけの理由からではあるまいとケーガンは考えている。
- (24) Thuc. II. 65.『戦史』上, 253 ページ。
- (25) 中村純, 55-81 ページ。
- (26) Thuc. VI. 90.『戦史』下, 122-3 ページ。このときアルキビアデスが、亡命者の身として自分自身の存在価値を少しでも高めておきたかったであろうことは想像に難くない。そのためにもスパルタの危機感を煽る大仰な物言いが必要であったと考えられる。
- (27) Thuc. VI. 8.『戦史』下, 29-30 ページ。
- (28) Thuc. VI. 8.『戦史』下, 30 ページ。
- (29) Thuc. VI. 26.『戦史』下, 50 ページ。
- (30) Thuc. VI. 47-50.『戦史』下, 73-75 ページ。
- (31) Thuc. VI. 48.『戦史』下, 73-74 ページ。
- (32) Thuc. VII. 8-15.『戦史』下, 150-6 ページ。
- (33) 本文 90-91 ページ, Thuc. VII. 42.『戦史』下, 186 ページ。本文 95 ページに挙げたシチリア遠征についての当初の計画(Thuc. VI. 8.『戦史』下, 29-30 ページ)やまた、スファクテリア占拠を可能とした、デモステネスに与えられた許可(Thuc. IV. 2.『戦史』中, 136 ページ)でも民会は現場の判断の余地を認めている。
- (34) D.Kagan, p.218-19.
- (35) Thuc. VII. 49.『戦史』下, 195 ページ。
- (36) Aristoph. Birds, 640.
- (37) J.B.Bury and R.Meiggs, p.305.
- (38) ヘルモクラテスは、「もしこれほどの大軍が陸軍に退却することに成功すればシケリアの何処かに陣をかまえ、又もや自分らに戦を仕かけてこようと考えるやも知れぬ、そうならば一大事である、と判断して、責任者たちのもとを訪ねると、この際敵側が夜暗にまぎれて撤退してしまうのを黙過すべきではないと、つぎの提案をなした」(Thuc. VII. 73.『戦史』下, 274 ページ)とツキディデスは報告している。
- (39) Thuc. VI. 9-25.『戦史』下, 30-50 ページ。
- (40) 中村純, 59 ページ, 78 ページ, 注 12,14,15 参照。cf. Liebeshuetz, p.294. なお、評議会の役割が抜け落ちた形になっている点については、cf. Hornblower, p. 251-264.
- (41) Ober, 1994, p.110.
- (42) Ober, 1994, p.110-118. cf. Ober, 1998, p.104-121.
- (43) cf. Thuc. I. 22.『戦史』上, 75 ページ参照。
- (44) この楽観的観測は必ずしも誤りではなかったことがやがてその後の事実展開において証明されることになる。cf. Liebeshuetz, p.296.
- (45) 本文 101-102 ページ参照。
- (46) Thuc. VI. 19, 24.『戦史』下, 44-5, 48-9 ページ。
- (47) J.Ober, 1994, p.114.
- (48) Thuc. II. 65.『戦史』上, 252 ページ。
- (49) D.W.Knight, p. 150-161.

- (50) Thuc. VI. 18.『戦史』下, 43-44 ページ。
- (51) ディオドロスは以下のように語っている。「その結果、危険きわまりない政策を説こうとする者が欺瞞によって大衆の支持を得るほかないのと同様に、より善き策を説く者もやはり偽りの言辭によって民衆の信頼をつかまなくてはならなかった。そしてついにひとりわがボリスにおいては、裏の裏をかく策に措かれ、何びとも完全な欺瞞による以外には、正面からよき政策を提唱できないという、稀有の有様を呈している。なぜなら、堂々とこれが善策だと提案すれば、その人は裏ではきっと私腹を肥やしているのだろう、と逆に疑いがかけられるからだ」。Thuc. III. 43.『戦史』中, 62 ページ。
- (52) Connor, p. 166.
- (53) 中村純, 76 ページ。
- (54) 中村純, 62-5, 74 ページ。cf. Ober, 2010, p.82-4.
- (55) cf. V.Ehrenberg, p.46-67, C.W.Macleod, p.39-65.
- (56) そもそもツキディデスのようにアテネがシチリアに軍を送るということの是非について、アテネ民会が歴史的知をもってその結末を正しく予見できなかったことがアテネ民会の欠陥であったと考えるならば、スファクテリア占拠の場合はことばで予見しえなかったことの成り行きがたまたま幸運な方向に進んで行ったに過ぎないと見ることになるのであろうか。しかしスファクテリアの成功が「アテネ人の性格」によるものであったとすれば、アテネが早晩西方に眼を向けるということ、なにかきっかけがあれば積極的行動に移るであろうということ避けがたいことだったのでないか。cf. J.B.Bury and R.Meiggs, p.305.
- また、もっぱらシチリア遠征の成否という観点から見るとすれば、アルキビアデスの召還もツキディデスの言うとおりアテネ民主政の悪しき体質がもたらした阻害要因のひとつであったと考えるのも当然であろうが、この点については少し別の問題を踏まえて独立に考察することが必要と考えるので、今は措く。
- (57) Thuc. IV. 2.『戦史』中, 136 ページ。
- (58) 中村純, 67-76 ページ。
- (59) 本文 95 ページおよび注 33 参照。
- (60) Thuc. VII. 48.『戦史』下, 194-5 ページ。
- (61) cf. Wassermann, p. 119-121.
- (62) 注 22 参照。
- (63) Thuc. VI. 24.『戦史』下, 49 ページ。
- (64) Thuc. VI. 24.『戦史』下, 49 ページ。
- (65) 柳沼承剛, 42 ページ参照。
- (66) 中村純, 72 ページ, Thuc. IV. 27-28.『戦史』中, 161-3 ページ参照。
- (67) 本文 88 ページおよび注 5 参照。
- (68) cf. Ober, 1998, 2008, 2010.
- (69) 前注および Manvill, 1996, Manvill and Ober, 2003. 参照。
- (70) 中村純 55-81 ページ参照。

文献リスト

- J.B.Bury and R.Meiggs, *A History of Greece*, London 1975.
- Connor, W.R., *Thucydides*, Princeton U.P. 1984.
- V.Ehrenberg, "Polypragmosyne", *JHS* 67 (1947), p.46-67.
- A.W.Gomme, A.Andrewes, K.J.Dover ed., *Historical Commentary on Thucydides*, Oxford 1945-81.
- V.D.Hanson, *A War Like No Other*, New York 2005.
- S.Hornblower, "Thucydides and the Athenian Boule (Council of Five Hundred) in *Greek History and Epigraphy*, ed. L.Mitchell, L.Rubinstein, The Classical Press of Wales 2009.
- D.Kagan, *Thucydides*, Viking, New York 2009.
- D.W.Knight, "Thucydides and the War Strategy of Perikles", *Mnemosyne* 23 (1970), p. 150-161.
- W.Liebshuetz, "Thucydides and the Sicilian Expedition", *Historia* 17 (1968), p.289-306.
- P.B.Manville, "Ancient Greek Democracy and the Modern Knowledge-based Organization: Reflections on the Ideology of Two Revolutions" in *DEMOKRATIA*, ed., J.Ober, Ch.Hedrick, Princeton U.P. 1996.
- P.B.Manville, J.Ober, *A Company of Citizens*, Harvard Business School Press 2003.
- C.W.Macleod, "Rhetoric and History", *Quaderni di Storia* 2 (1975), p.39-65.
- J.Ober, *Democracy and Knowledge*, Princeton U.P. 2008.
- J. Ober, "Thucydides on Athens' democratic advantage in the Archidamian War", in *War, Democracy and Culture in Classical Athens*, ed. D.M.Pritchard Cambridge U.P. 2010.
- J. Ober, "Civic Ideology and Counterhegemonic Discourse: Thucydides on the Sicilian Debate", In *Athenian Identity and Civic Ideology*, ed. A.L.Boegehold and A.C.Scafuro, The Johns Hopkins U.P. 1994.
- J. Ober, *Political Dissent In Democratic Athens*, Princeton U.P. 1998. F.Wassermann, "The Conflict of Generations in Thucydides", in *The Conflict of Generations in Ancient Greece and Rome*, ed. S. Bertman, Amsterdam 1976, p. 119-121.
- 加来彰俊, 「歴史記述の客観性」, 田中美知太郎編, 「歴史理論と歴史哲学」, 人文書院 1963, 365 - 399 ページ。
- 田中美知太郎, 「ツキディデスの場合」, 筑摩書房 1970, p.300-310.
- 柳沼重剛, 「シシリー島のニキアス」, 「文藝言語研究」文藝篇 1 (1976), 筑波大学, p. 33-50.
- 中村純, 「アテネ民主政と戦争—ミュティレネ叛乱とビュロス遠征」, 「言語と文化」10, 法政大学言語・文化センター 2013.
- トゥーキューディデース, 久保正彰訳, 「戦史」上, 中, 下, 岩波文庫 1966, 7.

(古代ギリシア史／文学部教授)